

## ダルマーニュ著『遊びと玩具』

助教授（西洋服装史担当）能 澤 慧 子

ロジェ・カイヨワは、1958年にその著書『遊びと人間』<sup>(註)</sup>において、遊びに関する過去の学説の変遷をкаいつまんで述べている。それによれば、社会学の分野では、遊びは永らく「大人の活動のうちで、真剣さを失って、無難な気晴らしになってしまったものの墮落した形」として捉えられていたが、これに対してホイジンガは、1938年にその主著『ホモ・ルーデンス』において、「文化の発展を可能にする豊かな創造性を持った約束事の根本にあるものが遊びの精神」であり、「文化のあらゆる重要な表現は、遊びを引き写しにしたものである」とした。

遊びが先か、大人の社会的活動が先かという相対立する両説を提示したカイヨワ自身は、ホイジンガよりも遊びの範疇を広げながら、かつ両説を肯定し、その間に矛盾のないことを説いている。すなわち、「遊びと玩具は、確かに、文化の残滓でもある」が、それらが社会的機能を持っていた前の時代においても、「ホイジンガが正しく定義しているような遊びの本質をすでに持っていたことに違いはない」のであり、「遊びの精神は、文化にとって本質的なものである」としている。

ホイジンガとカイヨワの二人の学説、あるいはその後の民俗学、社会学の側からの新しい見地により、今や文化史における遊び、および遊びの精神は高度に位置付けられていると言える。こうして見ると、遊びの道具である玩具の歴史も、意味深いものと考えられよう。

今回採りあげた『玩具の歴史』（Histoire des Jouets. Paris, Librairie Hachette & Cie, c. 1900）〔759-A〕の著者ダルマーニュ（D'Allemagne, Henri René）については、すでに

本誌74号（1985年1月20日発行）の同じ稀覲本の欄で、『100の回顧展：遊戯』の著者として詳しく紹介されているので、ここでは繰り返さない。

彼の玩具観は、その前文で次のように表明されている。

「玩具は子供にとっては、人生の見習いのようなものである。子供が何でも触れたり、見たり、覚えたり、知りたがる時に、子供がそうしたことを自然に始めるのは、自由に使える玩具によってである。彼はそれをひっきり返し、全神経を集めて観察し、その使い道、あるいは使い方を理解するであろうし、散々いじくり回した後で、ばらばらに壊してしまってから、ようやく満足するのだ。」（p.10）

「子供に玩具を与えるのは、大いに慎重でなければならない。玩具は子供の体力を増進したり、知力を向上させたり、ある程度はその感受性をも磨くものでなければならない。

玩具は、子供にとっては物言わぬ教育や経験の源泉であり、その教育や経験はほとんど常に無意



元曰。木馬、人形、太鼓、ラッパなどの玩具を買って買った、幸福そうな子供たち。背景にはテント張りの玩具店。

識であつたとしても、その価値は低いものではなく、子供の精神に深い痕跡を残すものである。」  
(p.12)

このように、子供の心身の教育にとつての重要な教材としての玩具観からは、合理主義や発達への信頼などが伺えるが、それは著者独自のものであろうか、それとも時代の傾向であらうか？

ともかくもダルマーニュはホイジンガ以前に、早くも遊びやスポーツに多大な関心を寄せ、そこに価値を見いだす洞察力を備えていたことは確かであり、その多彩な著作は、今日、こうした面からの文化史の研究に資するものと考えられる。

本書はアール・ヌーヴオーを思わせる紋様を表した白サテン地を張った美しい装丁の、316頁に及ぶ大著であり、色刷りのプレート50枚を始めとして、無彩色プレート16枚、文中の挿図などの図像も豊かである。内容は前文に続いて、

第1章、乳幼児の玩具（がらがら、大きな音の出るがらがら、風車）

第2章、馬、馬車、安価な玩具（馬頭つき棒、揺り木馬、木馬、機械仕掛けの木馬、馬車馬車ごっこ、その他の動物型玩具）

第3章、人形、及びその家具と調度（人形、ファッションを伝える人形、話したり歩いたりする人形、人形産業、人形の部屋、人形の家、家具、装身具、人形の調度等）

第4章、戦争ごっこの玩具（鉛の兵隊、武器、兵器等）

第5章、機械じかけの玩具（操り人形、自動の楽器、馬車、自動で歌う小鳥等、マリオネット、影絵）

第6章、物理学的玩具と機械（幻燈機、万華鏡、映画術の原形、自動、もしくは電動の玩具、風船とパラシュート）

からなっている。いずれも、それぞれの玩具のヨーロッパにおける発生時から、執筆当時までを辿っており、読者はヴァリエーションの豊富さ、たかが子供の遊び道具ごときに傾注された過去の

人々の技術力、発明心、それらを支えた情熱とも呼べる意志に驚かされよう。著者自身、前文において、フランスの玩具産業の規模、そのフランス経済に占める多大な位置に触れながらも、当時パリ警視総監が催した玩具のコンクールにおいて、年齢を問わず多くの観覧者を魅了したことによつても証明されたその魅力について、一層力説している。

他方、本書の第3章は人形、とりわけファッション・ドール（フランスのモードを伝えるため、着付けられ、諸外国に送られた人形）の歴史に関する古典書の一つともされている。その記述によれば、ファッション・ドールは早くも15世紀から始まり、すでにファッション・ブックが広く出回った19世紀半ばまで存続していた。こうした人形の登場とそれへの根強い愛好は、上述の、大人が社会での機能の失われたものを子供に与えるという玩具に関する古い説と全く逆の流れ、つまり玩具から社会的に機能する道具への変身の一現象として捉えることもできようし、またファッションに大人の遊びの要素が内在することの証明として捉えることもできよう。

注：Caillois, Roger ; Les Jeux et les hommes, le masque et le vertige. Paris, Gallimard, 1958  
清水幾太郎、霧生和夫 共訳『遊びと人間』岩波書店1970年



人形の着付けと散歩（ルイ・フィリップ時代に流行った版画より）。人形の背の紐（リジエール）は、歩き始めた幼児に使うものに同じ。